



コラムコーナー

国立保健医療科学院スタッフのコラムを紹介するよ!

災害保健研究者の立場から

奥田 博子

このたびの災害・事故により日常が一変し、3年が経過しました。

事故後から出会わせていただいた県下の保育士さんから、「自然とかかわる体験の減少」、「子どもにふさわしい生活時間やリズム確保が困難」、「飲料水や食材の不安」、「悩みを抱える保護者の増加」等、日々の保育を通じ当惑する事象の山積であることをうかがいました。子どもの健やかな成長のために、新たな学びの必要性、対応の工夫に邁進され、子どもや保護者の立場に立って、最善策を探ろうと、研修会をはじめ様々な機会に積極的に出向き、保育へ反映させる工夫を続けているみなさまのご尽力にここから敬服をいたします。

この3年間で長かったと感じる方、あっという間だったと感じられる方、様々であるように、非日常の出来事から不安、怒り、悲しみ等を体験された人にとって、その和らぎが得られるには、時間、具体的変化、支え(人、物、方策)など、影響をもたらす要因も人により多様です。

日々、お子さんの成長過程に寄り添う立場の保育士の皆さん自身が、安心して保育に従事していただけることが、子どもさんや保護者の方の安心にもつながります。その保育士さんの方々のバックアップとなるのが専門家の存在です。国内でも前例のない出来事の中、保育に邁進されるみなさんのご苦労に少しでもお役に立てることを考え続けてまいりたいと思います。

放射線生物学研究者の立場から

志村 勉

ヒトの放射線影響は、広島、長崎原爆被爆者、チェルノブイリ事故被災者、高自然放射線地域の住民の疫学調査によって解析されています。しかし、福島第一原子力発電所の事故で問題となる低線量・低線量率の放射線による人への影響については疫学単独での評価が難しく、放射線影響を理解するために実験動物や培養細胞を用いた実験研究により検討されてきました。事故当初は、科学的知見がどのようなメッセージとしてとらえられるのかの十分な配慮がなく、放射線に対する不安を引き起こしたことは大変残念なことです。DNA、細胞、組織、個体レベルと様々な段階での研究成果が人の放射線影響を考える上でどのような意味を持つのか、また研究者間で共通の認識として確立されていることなのかどうかを考慮して説明することが大切です。これまでも多くの研究者が放射線の生物への影響を解明するために研究を行ってきました。原発事故後には、研究者間の情報共有をさらに強化し、低線量放射線影響の解明に取り組んでいます。私は放射線影響研究に従事する研究者の一員として研究や支援活動を通して、今後も福島復興に貢献したいと思います。